

第74号

2010.5

## 伊藤外科ニュース

<http://www11.ocn.ne.jp/~itoh-hp/index.html>

## 暖かくなったこの季節

## 健康診断を受けましょう！

5月の連休は、今までの寒さを忘れるほどの暖かい天候で、私は気持ちも穏やかになりました。皆様もこの陽気に誘われて、楽しい時を過ごされましたか？

学生時代はスポーツに明け暮れた私も、いまや五十半ばになり、激しいスポーツはできなくなりました。スポーツジムで汗を流したり、ウォーキングや時々のゴルフで意識的に「早く歩く」ことで、健康に気をつけています。

しかし、体重70キロの私が速歩1時間を行っても、消費されるエネルギーは230キロカロリー程度だそうです。このエネルギーは、どら焼き1個(240キロカロリー)、ビール大瓶1本(255キロカロリー)より少ないわけですから、肥満予防のためには、いかに日々の食事に注意を怠ってはいけないかがわかります。

伊藤外科では栄養士さんが定期的に栄養教室を行っていますので、興味のある方はぜひ、スタッフに相談してください。

さて、5月より新宿区民の、さらに6月より中野区民の健康診断や各種ガン検診が始まります。最近、高齢者の方より働き盛りの方の健康状態の悪化を、私は心配しています。

高齢の方は生活のリズムも安定していて、多少の医療を受けながらも元気に過ごされている方が多いようです。一方、働き盛りの方は食事や睡眠時間が不規則で、体調を崩しがちです。にもかかわらず、医者にかからずに無理をして、かなり重症化した状態で来院されることがよくあります。

一年に一度は自分のために、そして家族のためにも健康診断を受けましょう。忙しくて時間の都合がつかない方には、ご相談も受け付けています。

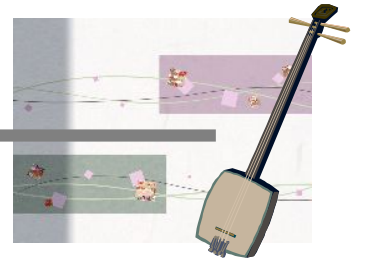
最後に——最近、テレビなどで話題になっている「<sup>けい</sup>頸動脈エコー検査」について、少しお話しいたします。

この検査では、頸動脈を首の表面から超音波で観察することにより、主に動脈硬化の程度を判断します。高血圧や糖尿病、高脂血症は全身の動脈硬化を引き起こすので怖い病気ですが、動脈硬化は自分自身で自覚できない場合がほとんどです。そうした動脈の状態を、簡単に痛くなく数分間で、外来で検査できる方法の代表として普及したのが、頸動脈エコーです。

検査で発見された動脈硬化は、悪化するのを予防できる時代になりました。気になる方は、健康維持のために、自身の状態を把握しておくことは大切です。



# 三弓先生の本棚



今回の一冊

## 『祇園の教訓』 岩崎峰子

三弓の本棚から、ひょいと手にとった一冊の表紙を飾っていたのは、紅の半襟をのぞかせた黒振り袖姿の舞妓はん。「ずいぶんと色っぽい本を…」と思ったら、数年前に日本のみならず、欧米でもベストセラーになった元・舞妓が記した『祇園の教訓』(幻冬舎刊)だった。

三弓が「祇園」などという場所にご縁があったかどうかは聞き及んでない。が、当人の口からこんな話を聞いたことがある——「十二社には昔、花街があつて、伊藤外科を開業(昭和34年)してからしばらくは、往診にいった先で三味線の音なんかが聴こえてきたもんだ」。

熊野神社のしおりによると、十二社にあつた池の界限には享保年間(1716-35)から多くの茶屋ができ、景勝地としてにぎわい、明治時代には花柳界として知られるようになったとか。最盛期には料亭・茶屋が約100軒、芸妓が300名ほどもいたという。十二社の池は昭和43(1968)年に埋め立てられ、花街も消えていくことになるのだが、かつては今の煩雑なビル群からは想像もつかない艶やかな風景が広がっていたのだろう。

で、話を『祇園の教訓』に戻します。著者の「岩崎峰子」という方は、昭和40-50年代前半、京都一の花街・祇園甲部でナンバー1を誇っていた舞妓(のちに芸妓)さんである。現在の祇園甲部は、舞妓・芸妓あわせて100名ほどらしいが、峰子さんが16歳で舞妓になった昭和40年には800名もいたらしい。時は高度経済成長まっただ中。以前、知りあつた京都の洛中(つまり、京のど真ん中)の呉服屋の娘がこんな話をしていた。「うちのおばーさんがよく言つてはつたわ。おじーさんが遊んだお茶屋の月の支払いが、グランドピアノ1台分にもなつたつて。」グランドピアノというものが、いったいナンボするのか知りませんが、まあ、数百万という単位なのでしょ。平成の大不況といわれる昨今では、夢物語のような話です。

峰子さんは4歳のとき、置屋の女将に「跡取りに」と望まれて、養女になった。生まれ持ったなにかと、それを見抜く目の縁である。彼女を見初めた女将は、ペリーが浦賀に来航した嘉永6(1853)年生れというから、当時、すでに100歳! 峰子さんは花柳界で生きていく基本をこの女将に仕込まれたというが、いくつまでかくしゃくとご存命だったのか。

本書には「昇る人、昇りきらずに終わる人」という副題がついている。著名の通り、「花柳界」という特殊な世界だからこそ垣間見ることができる、政財界・文芸界等々の著名人の姿も描かれているし、そこから著者自身が学んだ「人間学」、花柳界を支える人の姿が綴られている。

最後に、ワタクシが印象に残つた話をひとつ。お茶屋の玄関先には、お客様の出入りを預かる「下足番」なるおっちゃんがいる。ある日のこと、いつもは黙つて靴を揃えるおっちゃんが、常連の社長さんにこう言った。「後生どっさかい、早いところお医者はんに行つとくれやす」。長年、その客人の靴を見てきたおっちゃんは、ここ1カ月の靴の減り方がいつもと違ふと感じ、切り出したそう。その社長さん、まったく不調を感じていなかったらしいが、実際に病院に行つてみると、肝臓の異変が見つかり、命拾ひしたとのこと。下足番のおっちゃんいわく、「わけはわからへんにやけど、靴の減り方でわかんねん」——これこそ、プロの仕事である。(一弓)

